栗林忠男先生の思い出

学部を卒業した私が、大学院に進学するその年に還暦を迎えられた栗林忠男先生は、栗林研究会の門を叩いた時には既に、慶應義塾の常任理事という重責を担われていた。諸先輩からは、大変気さくな方であるとの評判を伺ってはいたものの、二十歳前の学生の稚拙極まりない情報収集能力をもってしても、先生が航空法、海洋法、そして宇宙法といった諸分野の権威でいらっしゃることは明らかであり、そのような栗林先生は、近寄りがたい雲の上の存在であった。

そんな当初の印象は、栗林研究会に入会した後に少しずつ変化していった。栗林研究会は国際法という分野のせいか帰国子女が多く、華やかで個性的な面々の集うゼミであった。ここでの二年間の先生との一番の思い出は、毎年夏と冬に伊東で開催されたゼミ合宿である。先生は、学生と遅くまで語り合われるのを楽しみにされており、夜どれほど遅く休まれたとしても、翌朝はどの学生よりも早く起きられ、パリッとしたご様子で朝からの勉強会に臨まれた。また合宿最終日夜の「芸術祭」と呼ばれるゼミ合宿最大の伝統行事では、ゼミ生が班ごとに分かれて演劇を行うのであるが、それを大層楽しみにしておられ、学生や大学院生と一緒に大笑いしながら鑑賞された。時に他愛のない流行にまみれた若者の感覚にも、興味津々にお付き合いくださり、何と心が自由で柔らかく、また好奇心に満ちた方でいらっしゃるかと、友人や先輩後輩と密かに驚かされたものである。

その後の五年間にわたる大学院時代は、まさに師弟関係の中で、先生のお人柄に間近に触れさせていただく機会が一層増えた。ここでは特に、先生に命を救っていただいたと述べても過言ではない出来事を記しておかなければならない。

勉強に明け暮れ不摂生が続いていた博士課程三年目の春、四〇度を超える原因不明の高熱が続き、自宅付近の都立病院に緊急入院したことがあった。入院後ずっと付き添ってくれていた母が夜一旦帰宅し、三日目の早朝に病室を再訪したところ、私の容態が急変し瀕死の状態にあったという。既に病院側の対応に大きな不安を募らせていた母は切迫し、すがる思いで栗林先生のご自宅に緊

急電話を差し上げたそうだ。早朝であったにもかかわらず、奥様から即座に受話器を受け取られた先生は、「これからすぐに慶應病院に連絡をするから、何も心配することなく小山君を一刻も早く救急車でそちらへ移すように」とのご指示をいただいたという。その後の一連の手続は極めて迅速で、その日の午前には、私は信濃町の病棟の広い個室のベッドに横たわっていた。慶應病院での血液検査の結果、その年成人の間で流行し複数の命を奪った「麻疹」と診断された。四二度近い高熱が九日間続いた後、無事生還することができたのは、あの時の栗林先生のお力と的確かつ迅速な判断によるもの以外の何ものでもない。

先生と出会ってからの約二五年間を思い返すと、その穏やかで温かいお人柄は終始変わることはなく、学部生の頃には、先生の特に「教育者」としてのお顔に触れさせていただく機会が多かったように思う。大学院生とその後社会人となってからは、加えて先生の「学者」としての力強いお姿を間近に拝見しながら過ごさせていただいた。国際法という学問に対して、これほどまでに熱意、誠意、そしてそれを研究する強い使命感とを常に持ち続けられた方を師と仰ぐことのできた幸せに、心から感謝せずにはいられない。いまだに拙い論文を書くとき、その結論をまとめるとき、今後はもう栗林先生のその視点のダイナミズムを伺うことができないのだと思うと、とてつもなく心細い気持ちでいっぱいになる。

「国際社会の趨勢とは、地を這う蟻の目と大空を舞う鳥の目との両方を駆使して常に観察しなければならない」、「保守と革新との中庸が最も大切であると考えるが、中庸よりもほんの少しだけ革新に寄ったところに僕は軸足を置いておきたい」。先生がゼミの時間におっしゃったこれらの言葉は、今でも私の心に深く刻まれており、それは今後も決して変わることがない。

中京大学教授　小　山　佳　枝